

## 【あらすじ】

大学准教授の駒田陽介（38）は、サヴァン症候群の能力を生み出す薬の開発をしている。研究室のスポンサーは、妻・香織（36）の父・信彦（65）の製薬会社。にもかかわらず陽介は、研究室を学生の山浦芙実（24）との不倫現場に使っていた。

そんなある日、新薬を投与していた一匹のアカゲザルが、突然絵を描いた。「すごい結果が出たので、期待していて下さい！」と信彦に報告する陽介。だが翌日、その絵が陽介と芙実との情事の様子だったことが発覚する。

薬の成果を公表したいけど、不倫はバラせない……と悩む陽介。しかも三日後に信彦が大学に来ることになってしまう。サルに他の絵を覚えさせようと躍起になるが、描いてくれなかった。

陽介は、芙実がサルの絵を不倫現場の様子に描き変えてしまったのではないかと疑いだす。彼女を問いただすと、サルの絵に加筆したことを認めた。だが芙実が描き加えたのは、ほんの一部分。サルは本当に二人のことを描いたのだった。

陽介との煮え切らない関係をサルに吐露していた芙実。「あの絵は、自分の幸せな姿を描いてくれたのだ」と主張する。だが陽介は芙実の言葉を信じようとしない。

そうこうしているうちに、信彦が来る前日になってしまった。陽介は一か八かで、芙実の言う『幸せな人間を描く』説に賭けることにした。

学生たちの幸せな姿をサルに見せる陽介。だがサルは興味を示さない。そこで陽介は、サル自身に幸せを感じさせようと、動物園や公園に連れていく。

だが結局、サルは絵を描いてくれなかった。信彦が怒って帰ろうとしたとき、サルが、陽介が自分を抱いている絵を描いた。

陽介は、この絵が自分の幸せな姿であることに気づく。自分は優秀じゃなくても、成果が出せなくても、愛という理由だけで繋がってられる関係を求めていたのだ、と――。

数ヵ月後。陽介は動物園で働いていた。猿山には、石で絵を描く一匹のサル。陽介は何もかもを捨て、このサルと生きる道を選んだのだった。

## 【登場人物表】

駒田陽介（38）大学の准教授

山浦芙実（24）駒田ゼミの学生・不倫相手

駒田香織（36）陽介の妻

駒田信彦（65）香織の父・製薬会社社長

駒田美紀子（62）香織の母

小野寺大<sup>まひ</sup>（33）陽介の弟・弁護士

小野寺雄一郎（67）陽介の父・弁護士

荒井（22）駒田ゼミの男子学生

江藤（22）駒田ゼミの女子学生

渡部（21）駒田ゼミの男子学生

熊木（23）駒田ゼミの男子学生

アカゲザル、清掃員、検閲所のスタッフ  
ニュースキャスター、子供A・B  
動物園の飼育員

○タワーマンション・外観（朝）

新築の高級マンションが、青空に伸びている。

○同・LDK（朝）

広々としたLDK。

妻・駒田香織（36）が楽しいそうに朝食を作っている。スクランブルエッグ、鮭、ヨーグルト、納豆、ご飯、パン、2人分とは思えない朝食メニューがダイニングテーブルを埋め尽くしている。

起きてくる駒田陽介（38）。

陽介「おはよう……」

香織「おはよ。昨日も遅かったの？」

陽介「うん」

香織「大学忙しいのね」

陽介「ちょうど今、薬の結果が出る頃だから」

香織「研究もいいけど、たまには早く帰ってきてね」

陽介「うん」

食卓に座る陽介。

香織「そうそう、今夜パパたちが久しぶりに  
ご飯食べようって」

陽介「お義父さんが？」

香織「どうせ薬の経過が知りたいんでしょ。

二人が揃うと、いつもその話」

陽介「ゴメンゴメン」

香織「今日は仕事の話は止めてよね。家族の  
会食なんだから」

陽介「気をつけます」

香織「ね、どんな服着てればいいと思う？」

陽介「んー」

香織「前にあなたに買ってもらった青いやつ、  
派手すぎるかな？」

陽介「いいと思うよ」

香織「じゃああれにしよつ。あ、ストールも  
必要よね。クリーニング出したままだっけ  
……」

ウキウキしてLDKを出ていく香織。

陽介、食卓にこれでもかと並んでいる朝  
食を見渡す。あまり食欲がない。

陽介「(トーストをかじって)……」

○××大学・内（朝）

緑豊かな美しいキャンパス。

「おはよう」と学生たちに挨拶をしながら歩いている陽介。爽やかで堂々とした姿だ。

○同・駒田研究室・内（朝）

入ってくる陽介。

駒田ゼミの荒井（22）、江藤（22）、渡部（21）、熊木（23）が研究をしている。

学生たち「おはようございます」

陽介「何か変わったことはないか」

荒井「いえ、特には」

陽介「……山浦くんは？」

荒井「あれ、さっきまでここにいたんですけど」

陽介「……」

○同・飼育室・前（朝）

新しい建物。ドアに『駒田ゼミ 飼育室』

のプレートが貼られている。  
セキュリティーカードをかざし、中に入  
っていく陽介。

### ○同・同・内（朝）

入ってくる陽介。

清潔感のある室内に、シンセサイザーや、  
クレヨンなどの遊び道具、数字のパネル  
などが置かれている。

真ん中の大きなケージ(檻)には、『駒田陽  
介 アカゲザル 130 週齢』と書かれた  
プレートが貼られており、中に一匹のア  
カゲザルが入っている。

アカゲザルの様子を見ている山浦芙実  
(24)。メガネで地味でおとなしそうな  
学生だが、巨乳である。

陽介 「おはよう」

芙実 「おはようございます」

陽介 「どう?」

芙実 「いつも通りです。食欲も正常です」

陽介 「そっか……」

静かにアカゲザルに見つめる二人。  
と、陽介の手が芙実のお尻の方に伸び、  
触れて、

芙実「……准教授」

陽介「ん？」

芙実「もうですか」

陽介「ダメ？」

芙実「まだ朝ですよ」

陽介「関係ないよ」

と、芙実のメガネを外す。

芙実「……」

芙実の首元を攻める陽介。

受け入れる芙実。

突然、ガチャツという音。

「!!」と姿勢を正す二人。

ドアを開けたのは清掃員だった。

清掃員「ちよつと掃除させて下さいネー」

ドアを開けたまま、掃除を始める清掃員。

陽介「……」

芙実「……」

陽介「(苛立ち始めて)」

芙実 「(ケージを見て) ……あ」

陽介 「？」

アカゲザルが、ケージの外にあったスケッチブックとひよいと取る。

そして、茶色いクレヨンを持ち、絵を描き始めた——!!

陽介 「!?——」

決して落書きではない、しっかりした線を描いている。

陽介 「う、嘘だろ——」

芙実 「言葉が出なくて——」

どんどんできあがっていく絵。

アカゲザルの真剣な眼差し。

啞然としながら、その光景を見ている陽介と芙実——

### ○タイトル『駒田准教授とモンキー画伯』

### ○××大学・駒田研究室・前

荒井の声 「これを、あのサルが!？」

○同・同・内

アカゲザルが描いたスケッチブックを  
見ている荒井たち。

スケッチブックには、茶色いクレヨンで、  
腰を屈めた二体の霊長類が描かれてい  
る。

江藤「ちゃんとした絵じゃないですか。本当  
に描いたんですか？」

陽介「あ、ああ……確かにこの目で見たんだ、  
なあ？」

芙実「は、はい……」

未だに信じられない陽介と芙実。

荒井「もしそうなら、とんでもないことです

よ！ 間違いなく薬の効果でしょう！」

渡部「あのサルって、サヴァン症候群の実験  
体ですよね？」

熊木「ああ。サヴァン症候群は左脳が損傷し  
たことにより、右脳がそれを補おうとして、  
急激に発達したという説がある。簡単に言  
えば、あのサルには、左脳の機能を一時的  
に低下させる物質を与えて、右脳の発達を

診ていたんだ」

渡部「効果観面じゃないですか！」

江藤「サヴァン症候群の原因を実証できれば、  
すごいことですよ」

荒井「准教授、すぐに論文の準備を！」

陽介「……そ、そうだね……」

と出口に向かっていく陽介。

芙実「どこいくんですか」

陽介「ちよつと、電話……」

と出ていく。

江藤「にしてもこれ、何の絵だろう？」

渡部「同じアカゲザルじゃないですか」

熊木「ここに来る前は、育成施設で他のサル  
と一緒にいたからな。そのときの様子を描  
いたのかもしれない」

江藤「じゃあ写生画じゃなくて、記憶を頼り  
にってこと？」

荒井「サヴァン症候群だって言われている山  
下清も、風景を見たあと、家である緻密な  
絵を描き上げたらしい。十分にあり得る  
ぞ！」

「すごいすごい」と盛り上がっている学生たち。

芙実、アカゲザルが描いた絵を見つめて、  
芙実「……」

### ○同・ベランダ

電話をかけている陽介。

陽介「もしもし、陽介です。……実はさつき、お義父さんに出資していただいたアカゲザルに変化が表れました」

### ○コマダ製薬・社長室・内

広い社長室で電話をしている駒田信彦  
(65)。

信彦「え、本当か!？」

### ○XX大学・ベランダ

陽介「はい。しかも、サヴァン症候群の能力の一つです」

(以降、カットバックで)

信彦「おお! で、どんな変化なんだ!？」

陽介「それが！ ……いえ、やめておきます」  
信彦「どうして!？」

陽介「ここじやもつたいたないので、今夜直接」

信彦「もつたいぶつてえー」

陽介「すごい成果ですから、ぜひ期待して  
て下さい！」

信彦「そんなにすごいのか……。わかった、  
今夜楽しみしてるよ」

陽介「はいっ！ ではまた後ほど」

電話を切る陽介、嬉しさがこみあげて—

### ○高級懐石料理・中庭（夜）

カコン、と落ちるししおどし。

### ○同・個室内（夜）

懐石料理を食べている陽介、香織、信彦、

妻の美紀子（62）。

美紀子「おいしい」

香織「うん、本当」

話を聞きたくて、そわそわしている信彦。

話をしたくてウズウズしている陽介。

美紀子「今日、二人とも静かね」

信彦「そ、そうか？」

陽介「そうですかねえ」

信彦「ところで、陽介くん。研究の方はどうだ？」

香織「やめて」

信彦「？」

香織「仕事の話しないで」

信彦「仕事の話じゃないよ。調子はどうかって聞いたただけだ」

美紀子「あなた」

陽介「調子は、いいですよ！」

信彦「そうかそうか。で……」

香織「(遮って)この服ね、陽介さんが買ってくれたの」

美紀子「まあ素敵じゃない」

信彦「……」

陽介「……」

香織「30過ぎてるのに派手かなと思ったんだけど、綺麗だよって言ってくれたから」

美紀子「よく似合ってるわ」

香織「ありがとう」

そこに、次の料理が運ばれてくる。

美紀子が一口食べて、

美紀子「おいしい」

香織「うん、本当」

信彦「……」

陽介「……」

### ○同・前(夜)

停まっているタクシー。

女性陣を待っている陽介と信彦。

信彦「ちっとも実験の話できなかったな」

陽介「はい……」

信彦「少しでもいいから教えてくれ。どんな効

果が表れたんだ」

陽介「サルが絵を描いたんです」

信彦「絵を!？」

陽介「はい。なぐりではなくて、ちゃんと目

的を持った絵です」

信彦「そんなことが……」

陽介「サヴァン症候群の原因が特定できたと  
なれば、医学界に革命が起きますよ。うち  
の研究室も、コマダ製薬も、世界中の注目  
を浴びます！」

信彦「(俯いて)……」

陽介「お義父さん……?」

感動して陽介の手を握る信彦。

信彦「ありがとう！ やっぱり君を婿に選ん  
だ俺の目に狂いはなかった！ 君みたいな  
男と家族になれて、俺は光栄だよ！」

陽介「僕こそ、すべてお義父さんのお力添え  
のおかげです！」

信彦「俺は薬を作る、君はそれを研究する、  
二人で天下を取ろう！」

陽介「はいっ、お義父さん！」

ガツチリと握手をしている二人。

と、香織と美紀子が店から出てくる。

香織「おまたせ……どうしたの？」

信彦「じゃあ陽介くん、近々大学に様子を見  
にいくから」

陽介「お待ちしています！」

タクシーに乗り込んでいく信彦と美紀子。

深々と頭を下げ、タクシーを見送る陽介。

○××大学・外観（翌朝）

○同・駒田研究室・内（朝）

陽介「おはよう！」

ハツラツと出勤してくる陽介。

陽介「アカゲザルの様子は？」

渡部「相変わらずです」

江藤「今日もたくさん食べて、元気いっぱいですよ」

陽介「（満足げに）うんうん」

と芙実が陽介に近づき、

芙実「准教授、ちよつといいですか」

陽介「？」

研究室を出ていく芙実。

陽介も後を追っていく。

○同・飼育室・内（朝）

陽介を連れてくる芙実。

アカゲザルはシンセサイザーで遊んでいる。

陽介「……どうしたんだ？」

芙実「実は昨日、スケッチブックをケージの中に入れて帰ったんです」

陽介「え？」

芙実「もしかしたら、あの絵はまだ途中なんじゃないかと思って。で、今日来てみたら、これが……」

陽介にスケッチブックを見せる芙実。

昨日の茶色い動物の絵に、オレンジのクレヨンで加筆されている。

腰を屈めた動物は、体つきがリアルになっており、背景には丸や四角の模様が加わっている。

陽介「こんなリアルに……!？」

芙実「はい」

陽介「画力も、記憶力も上がっている……す

ごい、すごいぞ!!」

芙実「……」

陽介「早速、この絵が何の風景なのか特定しよう！」

芙実「あの、もしかしたらなんですけど」

陽介「ん？」

芙実「この大きな長方形は、ホワイトボードじゃないでしょうか」

陽介「えっ」

芙実「で、この小さな四角が窓で、丸いのが時計。ここにホワイトボードと時計があって、ここに窓があるのって……」

ピン、と来てケージに背を向ける陽介。  
部屋の風景と、絵がピッタリ一致する。

陽介「……ここか！」

芙実「……おそらく」

陽介「でも、ここには他にサルなんていないよな」

芙実「ええ。出入りするの、私たちくらいしか……」

絵を眺める陽介。

陽介「——!？」

突然、陽介が芙実のシャツのボタンを開

ける。

芙実 「ちよつ、何ですか……!!」

陽介、途中で手を止めて、

陽介 「……まさか……」

芙実 「えっ?」

アカゲザルが描いた動物の胸元には、◆  
印が加筆されていた。

そして芙実の胸元にも、特徴的な菱形の  
痣がついている――

驚愕の表情を浮かべている陽介。

そのとき、アカゲザルがシンセサイザ―  
の高い『シ』の音を鳴らし続ける。

その音が、芙実のあえぎ声に重なって――  
――

### ○(回想) 一点を見つめるアカゲザルの瞳

澄んだ瞳。

黒目に、腰を屈めた二体の動物がぼんや  
りと写っている。それは立ちバックをし  
ている陽介と芙実の姿だ。

芙実のあえぎ声 「あつ、あつ、あつ……」

○(回想戻って)

シンセサイザーの音が鳴り響いている。

陽介「……」

芙実「……嘘……」

深刻な表情でケージの中を見る陽介。

無邪気に鍵盤を叩いているアカゲザル。

陽介「……」

○カフェ・内

コーヒーを飲んでいる陽介と芙実。

重々しい雰囲気。

芙実「……で、どうするんですか」

陽介「どうするって」

芙実「公表しないんですか」

陽介「するよ。絶対する」

芙実「でも」

陽介「(考えて) ……なんとか、ごまかせないかな？」

芙実「ごまかす？」

陽介「例えば、絵の痣を修正するとか」

芙実「改ざんするんですかっ」

芙実の大声に慌てる陽介。

陽介「じゃあ、昨日の絵のデータだけを公表

して、今日の分はなかったことにしよう」

芙実「実物を見せないわけにはいかないと思いますけど」

陽介「確かに……」

芙実「今から他のサルに投与するのはダメなんですか」

陽介「またサルを用意する金なんてないよ。

他のサルが成功するとも限らないし、第一

薬の結果が出るまで待てない」

芙実「どうして？」

陽介「共同開発元に、結果を報告することに  
なってるんだ」

芙実「共同開発元って、奥さんのお父さんで  
すか？」

陽介「(頷いて)」

さらに重々しい空気になる二人。

芙実「……なら、全てをさらすしかないです  
ね。男らしく」

陽介「できるわけないだろう」

芙実「下半身はだらしないけど、研究能力はある。それが事実じゃないですか」

陽介「君は何もわかってない。生徒に手を出したなんて判れば、大学はクビになるし、妻にも離婚される。コマダ製薬を敵に回したら、僕の人生は終わりだ」

芙実「……結局、准教授が大事なのは、自分の地位なんですね」

陽介「？」

芙実「だから奥さんと別れないんだ……」

陽介「君はそういう面倒くさいことを言わないと思ってたんだけどな」

芙実「……」

陽介「あ、そうだ」

芙実「？」

陽介「君があそこに男を連れ込んだことにしてくれないか」

芙実「――!!」

ピシヤツと陽介に水をかける芙実、カフエを出ていく。

陽介「……」

○陽介のマンション・LDK(夜)

ご機嫌の様子で夕ご飯の支度をして  
いる香織。

帰宅してくる陽介。

陽介「ただいまー……」

香織「おかえりなさいっ。あなた、すごいじやない!」

陽介「え?」

香織「今日パパから電話があったの。薬の研究ですごい結果が出たんでしょう?」

陽介「ああ……」

香織「私も鼻が高いわ。社長の娘婿が能なしじゃ、皆に示しがつかないもんね」

陽介「……」

香織「で、日曜日、パパと一緒に研究室に行くことになったから」

陽介「はっ!」

香織「パパに『仕事の話を嫌がる前に、陽介くんの努力を認めてやれ』って怒られちゃ

った。だから私も、あなたが働いている姿  
を見ておこうと思つて」

陽介「日曜日つて明明後日……？」

香織「うん。大学なんて何年ぶりだろう、楽  
しみ」

陽介「そ、そんな面白いところじゃないよ」

香織「そうだ、せっかくだから研究室の方々  
に挨拶した方がいいわよね」

陽介「無理しなくていいから！」

香織「……私が行つたら、嫌？」

陽介「ま、まさか！ 皆喜ぶよ」

香織「良かった！」

鼻歌交じりで料理を続ける香織。

陽介「……」

### ○信彦の家・美紀子の部屋（夜）

熱心に化粧している美紀子。

その後ろで、すでに出かける準備を終え  
た信彦が待っている。

信彦「いつになったら出れるんだ」

美紀子「もうちよつと」

信彦「(ため息)」

と、信彦の携帯に着信が入る。

信彦「(出て) はい」

### ○同・夫婦の寝室(夜)

こそこそ電話している陽介。

陽介「……もしもし、陽介です」

### ○信彦の家・美紀子の部屋(夜)

信彦「おう、どうした？」

(以降、カットバックで)

陽介「先ほど香織から、日曜日に大学にいら  
っしゃると伺いました」

信彦「そうそう。サルが描いた絵とやらを見  
せてもらいにな」

陽介「それがですね、日曜がですね、その、  
ちよつと都合が悪いんですよ」

信彦「そうなのか。なら、明後日はどうだ？  
明日でもいいぞ」

陽介「いや、今週はちよつと……」  
信彦「なるべく早く見たいんだけどなー」

陽介「すみません……」

信彦「でも絵を見せてもらうだけなら、君がいなくてもいいだろう。学生たちに通してもらおうよ」

陽介「困ります！」

信彦「どうして？」

陽介「香織が皆に挨拶したいと言っているの  
で、さすがに僕がいないと……」

信彦「それもそうだな……。30分くらいどう  
にかからないのか？」

陽介「え、ええ……」

× × ×

美紀子「あ、録画するの忘れてたわ……」

部屋を出ていく美紀子。

信彦「(美紀子に)早くしてくれよ!!」

× × ×

陽介「(信彦の声を聞いて)!!？」

信彦「……あ、もしもし？」

陽介「す、すいません！ 必ず日曜日に都合  
をつけますので」

信彦「そうかそうか。じゃ、よろしく頼むよ

っ」

一方的に切れる電話。

陽介「……」

ボタンとベッドに仰向けに倒れる陽介。

○××大学・内（朝）

力強い足取りで、出勤してくる陽介。

気合いの入った表情。

研究室の江藤が通りかかって、

江藤「准教授、おはようございます」

陽介「気づかない」……」

江藤「？」

飼育室に直行していく陽介。

○同・飼育室・内（朝）

アカゲザルの前に新しいスケッチブック

ク、クレヨン、リンゴを置く陽介。

陽介「ほら、描け」

アカゲザル「……」

陽介「このくらいなら描けるだろ！ ほら！」

アカゲザル「……」

赤いクレヨンを握らせようとする陽介。  
だがアカゲザルは、プイツとどこかに行  
つてしまう。

陽介「何で描かない！」

芙実の声「……無理ですよ」

振り返ると、後ろに芙実が立っていた。

芙実「サルにだって心があるんです。描きた  
くなくときだあってありますよ」

陽介「そんな悠長なこと言ってられないんだ」  
芙実「研究は地道について、いつもおっしやつ  
てるじゃないですか」

陽介「そういう場合じゃないんだよ！」

芙実「？ 何かあったんですか」

陽介「……明後日、お義父さんが来ることに  
なった」

芙実「えっ」

陽介「だからそれまでに、コイツに別の絵を  
覚えさせないと……!!」

アカゲザルを捕まえようとする陽介。

嫌がるアカゲザル。

芙実「やめて下さい！」

陽介を制止する芙実。

芙実の元に逃げるアカゲザル。

芙実「准教授にとつては、ただの実験材料か  
もしれません。でも、この子も私たちと同  
じ、感情を持つ生き物なんです」

陽介「……」

芙実「もっと思いやりを持って接してあげて  
下さい！」

芙実にだっこされているアカゲザル、怯  
えた表情を浮かべている。

アカゲザル「……」

陽介「くそっ！」

と飼育室を出ていく。

○同・同・前（朝）

出てくる陽介。と、スマホが震える。

『父』からだ。

陽介「？ ……もしもし」

○レストラン・内

ランチを食べている陽介と、小野寺雄一

郎(67)。

陽介「こつちに来るなら、もっと早く連絡してくれよ」

雄一郎「急に都合がついたからな」

陽介「何かあるの？」

雄一郎「司法研修所の同窓会」

陽介「へえ……あ、大(まさる)今海外にいるんだって？ 年賀状来てビックリした」

雄一郎「ああ。国際派弁護士になりたいらしい。うちの事務所の継ぐんだから、そのな  
の意味ないって言ったんだが」

陽介「相変わらず自由だな」

雄一郎「研究はどうだ？ 順調か」

陽介「うん、もう少しで成果が出る」

雄一郎「パーセンテージで言うと？」

陽介「パーセンテージ？ 80くらいかな」

雄一郎「そんなの確証にやらんぞ、99%まで  
もってけ」

陽介「……」

雄一郎「お前は野心は十分だが、詰めが甘いところがある。逆に、大はチャランポラン

だが必ず目的を果たす。社会が認めてくれるのは結果だ。だから俺は、大の方に弁護士を薦めたんだ」

陽介「……」

雄一郎「研究室の方も、駒田さんの支援がないとやっていけないだろう。縁故じゃなくて、実力でスポンサーをつけろ」

陽介「……」

雄一郎「いい仕事をしていれば、必ず目をつけてくれる人がいる」

陽介「……」

雄一郎、時計を見て、

雄一郎「お、そろそろだ。たまには、実家にも帰ってこいよ」

レストランを出ていく雄一郎。

フォークを握りしめている陽介。

陽介「(悔しくて……)」

### 〇××大学・駒田研究室・内(夕)

荒井、江藤、渡部、熊木がパソコンを囲んで何やら話している。

入ってくる陽介。

荒井「あっ准教授。サルが描いた絵、持って  
いますか？」

陽介「え……別のところに保管しているけど、  
どうして？」

江藤「今、色について調べているんです」

陽介「色？」

熊木「あの絵、茶色いクレヨンだったので、  
てっきりアカゲザルを描いたのだと思って  
ましたけど、もしかしたら何か心理状態が  
表われているのかもしれないと思って」

陽介「……」

パソコンを検索している荒井。

荒井「……あった。『茶色は、安定を意味する  
色。心理状態としては、スッキリしない、  
疲れ気味を表しています』」

渡部「檻の中でずっと飼われていますもんね」

江藤「ストレスはあるだろうねー」

陽介「(考えこんで) ……な、オレンジは？」

荒井「オレンジですか、ええと……『オレンジ

ジは、欲求を意味する赤色と、知恵を意味

する黄色が合わさった色。幸福のシンボルとして表される色でもあります』

渡部「そういえば、山浦さんってこういう色着ませんか」

熊木「幸せじゃないんじゃない？」

陽介「(考えこんで……)」

### ○同・食堂・内(夕)

人がまばらの食堂。

陽介が座っている席に、芙実がやってくる。

芙実「何ですか、話って」

芙実の前に、スケッチブックを置く陽介。

陽介「先日、これを見つけたときのことを、

もう一度教えてくれ」

芙実「……飼育室に入って、スケッチブックにまた絵を描いてないか確認したら、こうなっていたんです」

陽介「最初の段階で、君はまだ絵が途中だと思っ  
て、ケージの中にスケッチブックを置いて  
いったんだよね。何でそう思ったんだ」

芙実 「そんな気がただけです。確信があつたというより、可能性を試してみたんです」

陽介 「……」

芙実 「何ですか」

陽介 「僕はサルが茶色いクレヨンで描いてるのは見たけど、オレンジで描いているところは見ていない。だから、描き足したのが本当にアイツなのか疑わしくてね」

芙実 「どういう意味ですか」

陽介 「誰かがサルの絵を利用して、僕らのことであるかのように描き替えてしまったのかもしれない」

芙実 「……」

陽介 「率直に聞こう。オレンジのクレヨンで加筆したのは、君じゃないのか？」

芙実 「……」

陽介 「絵を公表できない状態にして、僕を追い詰めようとしてるんじゃないのか？」

芙実 「……違います」

陽介 「くだらない私情を持ち込んで、大事な資料をねつ造したんじゃないのか!？」

芙実「……」

陽介「……山浦くん。君も研究者の一人なら、この薬の開発が、どれほど貴重なことかわかるはずだ」

芙実「……」

陽介「だから、本当のことを教えてほしい。

……君はこの絵に手を加えたか？」

俯いている芙実……静かに頷く。

長いため息をつく陽介。

芙実「……でも、私が描いたのは、ここだけです」

と、◆マークを指さす。

陽介「え……」

芙実「准教授に、これが私たちのことだと気づいて欲しかったから」

陽介「じゃあ、他は本当にアイツが描いたのか」

芙実「はい」

陽介「……」

芙実「……二体の動物を描いたとき、すぐに自分たちのことだと気づきました」

陽介「?……」

芙実「私友達がいないので、ずっとサルに相談していたんです。准教授は、私を性の捌け口だとは思っていない。でも、あの人に求められるとどうしても嬉しくなってしまう、と……」

陽介「……」

芙実「あの子はきつと、私の幸福な姿を絵にしてくれたんです」

陽介「は？」

芙実「私が准教授に抱かれているときに一番満たされるのを知っていたから、その光景を暖かいオレンジのクレヨンを使って……」

陽介「(遮って) うん、もうわかった」

芙実「？」

陽介「君の不満は十分に理解した」

芙実「違います！ 私は、あのサルには本当に力があるって言ってるんです」

陽介「じゃあアイツが、君が幸せかどうかを判断して、その風景を絵にしたって言うの

か」

芙実「あり得ないことじゃないと思います」

陽介「バカバカしい」

芙実「人と動物は、通じ合えるんですよ。実際、飼育室で准教授に抱かれているときも、あの子とよく目が合ったんです」

陽介「見てたのか？」

芙実「はい、優しい目でした」

陽介「ヤらしい目の間違いだろ」

芙実「……」

陽介「僕の意見の方がずっと現実的だよ。大  
体、相手の感情を読みとるなんて、サヴァ  
ン症候群と真逆の能力じゃないか。ファン  
タジーじゃあるまいし」

芙実「……准教授には、一生わかりません」

陽介「？」

芙実「動物も人間も、出世の道具だと思  
っていないあなたには、一生わかりませ  
んよ」

去っていく芙実。

陽介「……」

○陽介のマンション・仕事部屋（夜）

本を読み漁っている陽介。

サヴァン症候群、薬学、心理学、動物学

……様々な書物を広げているが、解決策を見いだせない。

陽介「（ため息……）」

○同・LDK（夜）

コーヒーを淹れている陽介。

香織が愛犬たちにエサをあげている。

陽介「……な、犬の考えてることってわかる？」

香織「わかるわよ」

陽介「今はなに？」

香織「ご飯美味しいって」

陽介「……。逆に自分の気持ちが伝わることもある？」

香織「もちろん」

陽介「例えば？」

香織「落ち込んでいるときに膝に乗ってきた

り、痛いところペロペロ舐めたり」

陽介「そんなことあるんだ」

香織「あるわよ、家族だもん。(犬に)ねえ？」

陽介「(考えこんで……)」

### ○××大学・飼育室・内(朝)

入ってくる芙実。

陽介がケージの中のアカゲザルを見つめている。

芙実「……おはようございます」

陽介「おはよう」

芙実「早いですね」

陽介「……」

芙実「いよいよ明日ですか。この子に絵を描かせる方法は見つかりました？」

陽介「見つからない。……見つからないから」

芙実「？」

陽介「君を信じるしか、ないかもしれない」  
芙実「?……」

### ○同・駒田研究室・前

荒井の声「幸せな状況、ですか？」

○同・同・内

荒井、江藤、渡部、熊木を集めている陽介と芙実。

陽介「あのサルは、人が幸せを感じている様子を絵にしているかもしれないんだ。だから皆の幸福な姿をサルに見せてあげれば、また違う絵を描く可能性がある。ぜひ協力して欲しい！」

ポカンとしている荒井たち。

荒井「……何ですか、それ」

陽介「ん？」

江藤「スピリチュアルな話は好きですけど、それはちよつと……」

熊木「もつと信ぴょう性のある仮説を立ててから、検証した方が合理的ですよ」

陽介「これが一番信頼できる説なんだよ」

渡部「え、じゃあ、あの絵から何かわかったんですか」

陽介「それは……」

芙実「……」

荒井「わかったなら教えてくださいよ。あの絵はどういう意味だったんですか」

熊木「幸福な姿って何ですか、その見解に至った理由は？」

江藤「結局これは誰なんですか!？」

学生たちに詰め寄られ、困惑する陽介。  
と、芙実がドン！と机を叩く。

芙実「つべこべ言ってるので、黙ってやればいいのよ！ やれば！」

凄みの利いた芙実に、何も言えなくなる  
一同。

陽介「……」

### ○同・飼育室・内

クレヨンを持っているアカゲザル。その前に新しいスケッチブックが置かれている。

両脇に寄り添っている陽介と芙実。

陽介「一人ずつどうぞ」

×

×

×

まずは、荒井。グラスにビールを継ぎ足し、一気に飲み干す。

荒井「プツハァー！ うめー！」

陽介「ほら、幸せそうだろ？」

アカゲザル、全く荒井に関心を示さない。

陽介「……次っ」

× × ×

続いて、江藤。机に並んだスイーツを嬉しそうに頬張る。

江藤「はぁ、幸せ……」

突然、席を飛び出すアカゲザル。江藤のキーキを盗んで、逃げようとする。

陽介「あ、コラ！」

× × ×

次は、渡部。熊木にマッサージをしてもらっている。心地良さそうな渡部、今にも眠りそうだ。

陽介がふとアカゲザルを見ると、アカゲザルもウトウトしている。

陽介「……」

× × ×

最後は、熊木。大画面テレビで、ゾンビゲームをしている。

ゾンビを撃ち殺しながら、ハッハッと笑っている熊木。

引いている陽介と芙実。

耳をふさぐアカゲザル。キーキーと金切り声をあげる。

陽介「……ありがとう。もういいや」

×

×

×

飲みすぎてつぶれている荒井。

食べすぎて動けない江藤。

眠ってしまったっている渡部。

テレビゲームを片づけている熊木。

アカゲザルのスケッチブックは白紙のままである。

芙実「……結局、描きませんでしたね」

熊木「やつぱり、仮説が違ったんですよ」

陽介「……」

熊木「あ、二人は見せなくていいんですか」

陽介「えっ」

熊木「幸せな姿」

見合う陽介と芙実。

芙実「私のは、人前でできることじゃないから」

熊木「？　じゃあ准教授は？」

陽介「僕？」

熊木「はい」

陽介「僕の幸せは……（と考え込む）」

芙実「？……」

### ○同・屋上

一人、缶コーヒーを飲みながら景色を見ている陽介。

と、芙実がやってくる。

芙実「どうしたんですか」

陽介「どうもしないよ」

芙実「……自分の幸せが何かわからなくなつた。そうでしょう？」

陽介「僕の幸せは、この研究を成功させることだ。ハッキリしてる。……ただ」

芙実「ただ？」

陽介「何でそれを幸せにしているのかわから

ない」

芙実「……研究バカだからですよ」

陽介「……」

芙実「どうするんですか、明日」

陽介「今夜電話して、誤解でしたって言うしかない。許してもらえないだろうけど」

芙実「やっぱり、あの絵は見せないんですね」

陽介「当然だろ。他の絵を描いてくれるのを待つよ」

芙実「……」

陽介「僕の絵を描いてもらうには、幸せな姿を見せなきゃいけないし、幸せになるには、絵を描いてもらわなくちゃいけない。鶏が先か卵が先かだ」

芙実「……あの子自身は幸せなのかな」

陽介「えっ」

芙実「他人の絵ばっかり描いてるのって、悲しくないのかな……」

陽介「(考えこんで……)」

突然、屋上を去っていく陽介。

芙実「？」

○同・飼育室・内

入ってくる陽介。

ケージを開け、アカゲザルに首輪と紐をつけ始める。

○動物検閲所・外

『××動物検閲所』の看板。

外で作業をしているスタッフがいる。

陽介の車が停まり、陽介とアカゲザルが降りてくる。

陽介「すみません」

スタッフ「？ はい」

陽介「2年前にここで検閲を受けたアカゲザルなんです、コイツの親っていますか？」

スタッフ「は？」

陽介「家族がわかればと思って」

スタッフ「そんなことわかりませんよ。出生については、輸入元に問い合せてください」

陽介「そうですよね……」

スタッフ「育成施設も、出生情報まで管理し

ていないと思いますよ。ほとんど流れ作業  
ですから」

陽介「……」

スタッフ「万が一、親ザルを特定できたとしても、生きてる可能性は低いでしょう。親も実験動物ですし、もう殺処分されてるんじゃないですか」

陽介「……ありがとうございました」

### ○動物園・サル山・前

アカゲザルを連れてくる陽介。

サル山にはたくさんのアカゲザルがいる。

陽介「お前の仲間だ。嬉しいだろ？」

不思議なものを見るような目で、その光景を見つめているアカゲザル。

と、一匹のアカゲザルが陽介たちの前にやってきた。目の前の仲間を迎い入れて  
いるようである。

見合う、二匹のアカゲザル。

陽介「?……」

○公園（夕）

すっかり夕暮れ時になっている。

アカゲザルを連れてくる陽介。

生まれて初めて見る光景に、驚いている  
ような顔のアカゲザル。

陽介「自由になってみるか」

アカゲザルの首輪を外し、木に乗せてみ  
ると、ゆっくり登っていく。

陽介「いい景色だろ」

そのとき、アカゲザルがピョンと隣の木  
に飛び移る。

陽介「！」

一気に木を下り、公園の外に飛び出そう  
とするアカゲザル。

陽介、横からトラックが近づいているの  
に気づいて、

陽介「危ない!!」

急停車するトラック。しばらくして再び  
発進していく。

道路の向こう側に、目を丸くしているア

カゲザルがいた。

陽介「良かった……」

### ○××大学・飼育室・内（夜）

アカゲザルを抱きかかえて入ってくる  
陽介。アカゲザルは、陽介の腕の中で眠  
っている。

そつとケージの中に入れる陽介。アカゲ  
ザルの横にスケッチブックとクレヨン  
を置く。

陽介「おやすみ……」

電気を消して、部屋を出ていく陽介。

### ○陽介のマンション・寝室（夜）

鏡台の前で、香織が念入りにフェイスケ  
アをしている。

ベッドに寝転がっている陽介。

香織「明日の差し入れ、何がいいかしら？」

陽介「何でもいいよ……」

香織「皆若いから、たくさん食べるわよね」

陽介「……」

香織「甘いお菓子と、ポリウムがあるもの  
だったら……」

陽介「(遮って) もう寝るね。おやすみ」  
布団にもぐりこむ陽介。

### 〇××大学・外観(翌朝)

### 〇同・駒田研究室・内(朝)

データ入力などをしている、芙実、荒井、  
江藤、渡部、熊木。

そこに陽介、信彦、香織が入ってくる。

学生たち「おはようございます」

陽介「おはよう。こちらコマダ製薬の駒田社  
長と、妻の香織。アカゲザルを見学しに来  
たんだ」

学生たち「はじまして」

陽介「うちの研究室の学生たちです」

信彦「どうぞよろしく」

香織「陽介の妻です」

江藤「綺麗な奥さんですねえ、准教授」

陽介「(笑顔をつくり)」

芙実「……」

香織「これ、良かったら皆さんで食べて」

差し入れを渡す香織。

「うまそー」と喜んでいる荒井たち。

香織「(見回して)あなた、いつもここで働いているのね。思ったよりも綺麗なところ」

信彦「サルはここじゃないのか」

陽介「別の部屋で飼育しています。では、そちらにご案内しますね」

部屋を出ていく陽介たち。

去り際、芙実と目が合う香織。

逃げるように目をそらす芙実。

香織、女の勘みたいなのが働いて、

香織「……」

### ○同・飼育室・内

入ってくる陽介、信彦、香織。

アカゲザルは相変わらぬの様子だ。

香織「これが実験用のお猿さん？ 可愛いよねえ」

信彦「で、コイツが描いたっていう絵は？」

ケージの横に、スケッチブックが裏返しになって落ちていた。

陽介、緊張しながらゆっくりスケッチブックを引っくり返すと――

陽介「!!――……」

信彦「(後ろから覗き込んで)……なんだ。何も描いてないじゃないか」

スケッチブックは白紙だった。

陽介「……」

信彦「陽介くん、早く見せてくれよ」

陽介「……申し訳ありませんでした!!」

信彦・香織「？」

陽介「アカゲザルが絵を描いたっていうのは、

僕の勘違いだったんです……」

信彦「勘違い……？」

陽介「早とちりで報告してしまって、何とか絵を描いてもらおうとしたんですが、ダメ

でした……」

信彦「ダメでしたって……じゃあ、絵なんて

最初からなかったのか」

陽介「はい……」

信彦 「俺をずっと騙していたってことか!？」

陽介 「申し訳ありません……」

香織 「……」

信彦 「ふざけるな！ わざわざここまで来させて、バカするのもいい加減にしろ！」

陽介 「……」

信彦 「君がこんなデタラメな男だと思わなかったよ！ 帰る!!」

帰ろうとする信彦。

香織 「パパ！」

陽介 「(頭をさげたまま) ……」

信彦の声 「何だ君は」

陽介が「？」と顔を上げると、入り口に  
芙実が立っていた。

芙実 「准教授は嘘をついています」

陽介 「!？」

信彦 「どういうことだ」

芙実 「このアカゲザルは確かに絵を描いたんです。しかし、その絵は——」

陽介 「山浦くん！」

芙実 「——私が捨ててしまいました」

陽介「!？」

信彦「何だと……?」

芙実「昨日の夜、この子が描いた絵をゴミ箱に捨ててしまい、最悪なことにパソコンのデータも消してしまっただけです。悪いのは全て私なんです。准教授は責任者として、罪を被ってくれているだけです」

陽介「……」

芙実「でも、アカゲザルが絵を描いたのは本当です。ですから、准教授に少し時間をあげてください。お願いします」

深々と頭を下げる芙実。

陽介「山浦くん……」

香織「……」

信彦「……呆れたよ」

陽介「へ?」

信彦「君は自分の評価のためなら、教え子まで利用するのか」

芙実「ち、違います!」

信彦「もう君の顔は二度と顔も見たくない! 金輪際俺の前に現れないでくれ! 共同研

究の話もなしだ！」

陽介「待って下さい！」

信彦「どいてくれ！」

香織「(叫ぶ)み、見て!!」

一同「？」

ゆっくりケージを指差す香織。

アカゲザルが緑のクレヨンで絵を描いていた――

陽介「か、描いてる――」

信彦「本当だったのか――!」

香織「(言葉も出ず――)」

芙実「――」

描きあがり、スケッチブックを捨てるアカゲザル。

陽介がそれを拾うと、そこには、大きい霊長類が小さい霊長類を抱きかかえている姿が描かれていた。

陽介「!――」

信彦「すごい! 本当に絵を書いた! 描い

たじゃないか! ハハハハハ!

香織「信じられない……」

芙実、アカゲザルが書いた絵を見て、

芙実「……これ、この子と准教授じゃないですか？」

香織「えっ」

陽介「……」

芙実「絶対そうですよ。きっと、自分の幸せな姿を描いたんです。この子の幸せは、准教授とずっと一緒に……」

陽介「……違う」

芙実「？」

陽介「これは、僕の幸せな図だ」

香織「どういうこと……？」

陽介「……僕は無償の愛が欲しかった……優秀じゃなくても、成果を出さなくても、決して失うことのない絆……愛っていう理由だけで繋がってられる関係が欲しかったんだ……」

芙実「……」

香織「あ、あなた……？」

アカゲザルが描いた絵を見つめて、

陽介「この姿は、僕がずっと求めていたもの

だ……能力も言葉もいらぬ、ただそこに  
いるだけで満たされるような、そんな存在  
になりたかった……」

芙実「……」

香織「……」

信彦「よし、どんどん投薬しよう！ サルも  
増やして、左脳の損傷も大きくしよう！  
今度は絵じゃなくて、文字も書けるかもし  
れないぞ！ ハハハハハ！」

陽介「……降ります」

信彦「あ？」

陽介「……僕、この研究から降ります」

信彦「何言っているんだ」

陽介「……」

信彦「おい、陽介くん……」

肩を叩こうとして、ハツとする信彦。陽  
介が泣いていることに気づく。  
大人げなく、おいおいと泣く陽介に、声  
をかけられない一同――

## ○同・女子更衣室

着替えている芙実。

そこに香織が入ってくる。

芙実「？……」

香織「さっきは、ごめんなさいね」

芙実「何がですか」

香織「主人の、あんな姿見せてしまつて……」

芙実「いえ、私は別に」

香織「山浦さんでしたっけ」

芙実「はい」

香織「主人とは長いんですか」

芙実「え？」

香織「一緒に研究しているのは」

芙実「3年前からです」

香織「そうですか……」

外から信彦の声がする。

信彦の声「香織、そろそろ行くぞ」

香織「はい。じゃあ……」

帰ろうとする香織。と、芙実の荷物の中にスケッチブックが入っていることに気づく。

香織「これ、さっきの絵？」

芙実「あ、ちがつ……!」

スケッチブックを開く香織。

そこには、アカゲザルが最初に描いた、  
陽介と芙実のセックスの様子。

香織「?……」

ハッと胸元を隠そうとする芙実。

香織「!？」

咄嗟に芙実の腕を掴む香織。

芙実の胸元にある菱形の痣と、絵の◆の  
マークを見比べて、

香織「……」

芙実「(恐怖で)……」

芙実の腕を掴む香織の手がワナワナと  
震えている――

### ○地方の町並み(季節変わって)

一台のタクシーが通過していく。

### ○タクシー・内

オシャレな高級スーツを着た小野寺大  
(33)が乗っている。手には、陽介の住

所が書かれたメモ。

○古びたアパート・前

『小野寺』の表札。

やってくる大。チャイムを鳴らす。

扉が開き、冴えない格好の陽介が顔を出す。

陽介「大……」

大「久しぶり、兄さん」

○同・内

座っている大、生活臭が漂うアパートの  
中を見回している。

大にお茶を出す陽介。

大「……今、何してるの」

陽介「清掃のアルバイト」

大「驚いたよ。突然大学辞めたって聞いて」

陽介「父さん、怒ってた？」

大「もうカンカン。親子の縁切るって言う  
る」

陽介「だろっなあ」

大「あ、香織さん再婚するらしいよ。あの人も切り替え早いよな。これ見よがしに実家にハガキ送ってきた」

陽介「(微笑み)」

大「……で、何があつたの？」

陽介「？」

大「仕事も辞めて、家庭も捨てちゃって」

陽介「離婚は向こうからだよ」

大「金も地位もあつたのに、何で放棄したんだよ。人生うまくいったじゃん」

陽介「理想の暮らしがしたかったから、かな……」

大「これが……？」

陽介「まあね」

大「ふーん……俺さ、ずっと兄さんのことくだらないって思ってたんだ」

陽介「……」

大「自分が何がしたいかっていうより、他人に認められることが最優先で、生きてて何が楽しんだらうって」

陽介「？」

大「……だからさ、今回ちょっとドキツとした」

陽介「(なんか嬉しくて……)」

大「トイレ借りていい？」

陽介「うん」

トイレに入っていく大。

と、テレビからニュースが流れる。

ニュースキャスター「今日、東京都××大学の研究室で、実験動物のアカゲザルが、別のアカゲザルとすり替えられていることが分かりました」

陽介「……」

ニュースキャスター「すり替えられていた時期はわかっておらず、警察は内部事情を知る人物の犯行が強いと見て、捜査を進めています」

陽介「……」

## ○動物園・内

清掃服姿の陽介が、箒で掃いている。

飼育員が、アカゲザルのサル山の前に子

供たちを案内する。

夢中でサル山を見ている子供たち。

子供A 「ここには、どれくらいのサルがいる  
んですか？」

飼育員「約70匹が共同生活しているんですよ」  
子供B 「そんなにいるんだー」

飼育員 「じゃあ、次に移動しましょう」

子供たちが去ったあと、サル山を見る陽  
介。

端っここで、一匹のアカゲザルが石で壁に  
絵を描いている。

その夢中な姿を見て、微笑む陽介。

【了】